●二人で味わう古典和歌（98）

あらさかの神の御酒をたげたげと言ひけばかもよ吾が酔ひにけむ

作者未詳

『常陸国風土記』に、卜部氏の同族が毎年四月十日に祭りを設けて、酒を飲み舞った際の作として掲出歌が記されている。「新しい神酒を飲め飲めと、あんまり言うもんだから、すっかり酔ってしまったよ」。おめでたい宴席で詠い、舞っておどけるいかにも古代的な朗らかな場面が想像される。飲め飲めという意味の「たげたげ」の音感も一首を賑やかに響かせる。

一方で、これを現代の感覚で読むとなんとなくひっかかる。新しい神酒とはいえ「飲め飲め」と煽るのはアルハラではないか。いや、これは自分の飲み過ぎを人のせいにしている言い訳の歌なのかもしれない。にしても。

筑波嶺の嶺ろに霞居過ぎかてに息づく君を率寝て遣らさね　　作者未詳『万葉集』

「筑波山の嶺にかかる霞のように嘆くばかりで一向に進まぬあの男。こちらから引き込んで寝て帰しておやりよ」。「率寝」は「連れ込む」の意味。姉御的な立場にある年上の女が年下の娘に対して、ぐずぐずして女を誘う度胸のない男は自分から連れ込んでしまいなさいと、せっついているような場面か。

橘の寺の長屋に我が率寝し童女放髪は髪上げつらむか　　作者未詳『同』

「橘の寺の長屋に私が引っ張り込んで寝た、童女髪というか放髪というかあのおぼこ娘は、もう一人前に髪を結い上げていることだろうか」。老僧がかつて寺の長屋に童女を連れ込んだと自慢する体の歌。

一首目は今ならとんでもないセクハラだろう。二首目は、もはや通報案件である。宮藤官九郎脚本のドラマ『不適切にもほどがある！』が話題だが、いつの時代にとっても過去の時代は不適切だらけだということがわかる。それも含めて文学の楽しみだとも言える。私たちが作る歌も、未来を生きる歌人たちが読んだら、なにかがとてもずれている……、と思うのかもしれない。

（小島なお）